

### OpenFOAMを使ったミルククラウン解析 について

### 〇田村守淑 今野雅(株式会社OCAEL) 大島聡史(名古屋大学)



# はじめに

- Rieber & Frohn (1999)はVOF/PLIC法で液滴の飛散を数値計算を実施
- 衝突で発生する液膜半径の拡大因子(Spreading factor)をYarin&Weiss(1995)らの漸近解と比 較し良好な結果
- また,彼らは液膜の縁ではRayleigh不安定性によって突起(Cusp)が発生するが,その突起の数を Rayleigh理論に基づいて比較
- 冨原は実験再現を目的に,interFoamを用いた数値計算を実施
- 本研究ではRieberらと同じ条件について,interlsoFoamを用いた数値計算を実施し,interlsoFoam

ついて同様のValidationを実施





U:pressureInletOutlet p\_rgh:totalPressure alpha.liquid:zeroGradient



#### Reiberらの研究のCASE Aとほぼ同様の条件

項目	記号	単位	数値
水滴密度	$ ho_L$	kg/m <sup>3</sup>	1000
空気密度	$ ho_G$	kg/m <sup>3</sup>	1.0
水動粘度	$\mu_L$	m²/s	1.0e-3
空気動粘度	$\mu_G$	m²/s	2.5e-5
表面張力	σ	N/m	0.073
ウェーバー数	We	-	250
オーネゾルゲ数	$O_h$	-	0.0014
フルード数	$F_r$	-	38.0
液膜比	h/D	-	0.116



## 計算モデル/計算機/計算条件

項目	内容		
ソフトウエア	OpenFoam v2106		
計算ソルバー	interIsoFoam		
乱流モデル	なし(laminar)		
div(rhoPhi,U)	linearUpwind		
p_rgh alpha.* U	PCG/DIC smoothSolver/GaussSymmSeidel		
tolerances	1.0e-8		
endTime	15.2msec (T=D/V=3.5)		

項目		内容		
機関		九州大学 情報研究開発センター		
使用システム		サブシステム A		
演算 ノード	CPU	Intel Xeon Gold 6154(Skylake-SP) 3.0GHz(Turbo 3.7GHz)18core 2 node		
	理論演算性能	3456 GPLOPS/node(倍精度)		
	メモリ	DDR4 192GB/node		
	メモリ帯域幅	255.9 GB/sec/node		
使用計算ノード数		8 (288並列)		

Case	model	maxCo	Δ[μm]	Cells	Execution Time (h)
Reiber	14対称	-	50	320 <sup>3</sup>	-
1	$\uparrow$	0.2	$\uparrow$	$\uparrow$	27.0
2	$\uparrow$	0.1	$\uparrow$	$\uparrow$	54.0
3	$\uparrow$	0.2	100	160 <sup>3</sup>	0.4
4	%対称	0.2	50	640×320 <sup>2</sup>	62.4





### Time: 0.1msec



Case1  $\Delta$ =50 $\mu$ m

Case3  $\Delta$ =100 $\mu$ m



メッシュ解像度の影響



2



Time: 0.1msec



Case1 maxCo=0.2

Case2 maxCo=0.1









2021/12/3





### Time: 0.1msec















2021/12/3

OpenCAEシンポジウム2021

10

## ミルククラウン半径とその拡大因子





拡大因子の時間履歴

Reiber CaseA 回帰式 $r/D = 1.058 \cdot T^{0.459}$ Yarin 漸近解 $r/D = 1.027 \cdot T^{0.5}$ 



OpenCAEシンポジウム2021

12





#### Time: 0.1msec



#### Case1 maxCo=0.2

#### Case2 maxCo=0.1



突起数の推移



## 軸対称性について

### Case1

Time: 1.0msec



U Magnitudeの分布(Z=2mm)





4.5

- 3.0 - 2.0 B - 2.0 D - 1.0 N

0.0

OpenCAEシンポジウム2021

Time: 1.0msec

## おわりに

- OpenFOAMの気液2相流の界面捕獲用のソルバーinterIsoFoamを用いて,ミルクク ラウンについてRieberらのケースAと同じ条件で計算を実施した.
- ・ interIsoFoamの界面捕獲性能を評価しValidationを行った.
- ミルククラウンの拡大因子と突起数の時間経過を比較した結果,拡大因子についてはRieberらの回帰式とほぼ同様の結果となったのに対し,突起数については異なったものとなった.
- ・特に計算制御の最大クーラン数であるmaxCoによって異なる結果が得られた.
- ミルククラウンの形状がRieberらのものと異なる理由として, interIsoFoam特有の spurious currentの影響があるものと考えられた.
- ・本研究は,一般社団法人オープンCAE学会HPC小委員会の課題として実施しました. ここに謝意を表し御礼致します.



## ご清聴ありがとうございました

